

◇ 2月の天文暦 ◇

日時	記	事
2 24	上 弦	
4 20	立春 (太陽黄経 315°)	
10 16	月 食	
17	望	
13 10	月 最遠	
18 21	下 弦	
19 16	雨水 (太陽黄経 330°)	
25 19	朔	
26 6	月 最近	



(成相恭二氏撮影)

ガルト・ウェステルハウト (G.Westerhout)

大御所 Oort のもとで育った人。中性水素線 (波長21センチメートル)や短波長の電波観測で一時代を作った。

1955年頃,当時のオランダのグループによって,口径7メートルでの銀河系水素線の観測がほぼ終了し,オランダは当時としては短波長に使える世界最大(マンチェスタの75メートルはまだ水素線をねらっていなかった)の口径25メートルの電波望遠鏡を建設した。故畑中教授がそこを訪れ,完成直後の写真を送って下さった。われわれがそれを手にしながら何ともいえないがゆさをかみしめたことを今でもよく覚えている。もっともそういう気持ちはそれ以来ずっと持っているけれども,とにかく当時まだ20メートル級の望遠鏡による短波長(波長75センチ,20センチ等)の観測は誰も手をつけ得なかった時に,大口径・高精度という電波天文学の一つの進み方を示した。そして彼はこの25メートル電波望遠鏡によって,有名は“W”型録の作成の他,水素線等の観測によって銀河系の渦状構造を確定づけて行った。今や銀河系H II領域はいろいろな意味で新しい研究の場となってきているが,電波関係の研究については,その領域の座標を示すようなものが“W”型録である。1965年頃彼はアメリカに招かれ,メリーランド大学の天文学教室主任教授としての活躍が始まる。そして,完成直後の

グリーンバンク (NRAO) の90メートル電波望遠鏡による水素線のサーベイを始めた。その第1回の結果は特定領域の銀河面付近に限られているが,特殊なタイプ印刷となって世界の研究者や研究所に配られている。わが国でもこのデータをいじったり,眺めたりする人が増えているようである。聞く所によると,グリーンバンクの90メートルはその後,面のハリカエがあり,さらに精度をあげて第2回以降のサーベイを続けているそうである。この21センチメートルの型録は彼の“W”型録に次ぐものであって,将来かなり重要なものになってこよう。“W”型録といえども発表当時は現在ほどその重要性が認識されなかったのである。

来日は1963年国際電波科学連合東京総会の時。仙台の高窪教授と親交あり。その後私(筆者)はやはりURSIのミュンヘン総会でお目にかかり,空電の田中教授達と一緒にこれが本場のビールとばかり痛飲したことがある。千葉県教育センターの佐藤文男氏は数年来90メートルによるウェステルハウトのサーベイの解析研究を続けており,ウェステルハウトの教示をまともに受けている一人である。(赤羽賢司)

